

アートから見る日本社会
オーラルヒストリー課題:太平洋戦争

笹沼勇人

13-06505

インタビューの文字起こし

祖母にインタビューをしました。

自分「まず、太平洋戦争のころの 1950 年代について、どんな状況で、どんな経験をしていたか教えてください。」

祖母「私は 1935 年生まれで、戦争が始まったころは小学校一年生でした。入学して間もなく戦争が始まったことを知らされましたが、最初の方は全然そういう気配を感じられませんでした。というのは、栃木県の田舎に住んでいたのです。それで、三年生になってから、まず学童疎開ということで都会の子がどんどん田舎にきました。そして、宿泊先はお寺や工場が主、食事は三年目ころから非常に貧しくなってきました。いわゆる配給制度になって一軒のうちに一人に対しこれくらいという風に、好きなように買えませんでした。それも不定期でした。自給自足的に畑なんか、空き地を耕して生産しました。食べ物はそういう感じでした。学校は学童疎開というのがあって、三年生ころになると都内の学校から分散して、親元を離れて生活をしていました。」

自分「田舎に疎開となると、栃木の場合、受け入れる側だった？」

祖母「文京区小石川あたりの学校がどんどん栃木に来ました。区によっては長野とか、もっと東北の方とかに分かれて、子供だけで、保母さんや先生がついて田舎で生活をしました。そういう小学校生活を送りました。私は栃木の田舎に住んでいたのです。都会から来た子を受け入れた側です。土地の人は比較的食糧なんかも、従来のように手に入ったけれども、疎開して来てた子供はお寺で配給されるものだけしかなくて、着るものもひどかったですよ。大体はお下がり、よそから古着を調達してそれを配給というか、その年齢にあった人のところに分けるという感じ。履物なんかはほとんど手作りでした。下駄を自分たちで手作り、靴は終戦になるに従ってで、靴はほとんどなかったです。わらじなんかを作って、うわばきに使いました。藁をたたいて柔らかくして編んだわらじがほとんどの履物でしたから、雨の日は濡れちゃって大変でした。」

「あと食べ物とかはお米はだいたい玄米のようなものが配給になって、よくドラマなんかでやるように、一升瓶の中にお米を入れて、上から棒でトントンと叩いて、ぬかを落として、それで少し白くなったお米を炊く。でも、そのお米の中においも、ジャガイモサツマイモとかサトイモとかをさいの目、1センチ近く位にしてご飯の量を増やすようにして、炊いたご飯。お弁当は比較的農家のものが多かったけど、ない場合はお昼は抜いたりして、育ち盛りの子が食べられなかった、という状態は時々ありました。終戦に近付くにつれて、食べ物はどんどん陰しくなってきたという感じでした。」

衣食住…着るものはさっき少しお話しましたが、お下がりとか、生地なんかはみんな現地の兵隊さんの服になるために、親が以前から持っていた洋服を縫い直したりして、男の子が女の子のような洋服を着たりしてましたね。それから、住まいはもう新しく建てるなんてことは、資材がなかったから、古いものを壊して立て直したり、家族で疎開してきた人たちは非常に悲惨だったと思います。資材が手に入らないので。学校生活は、教室が兵隊さんの宿舎に建っていたために、生徒は半日だけ勉強して、もう半日は今度、教室を半分ずつ、人員が半分ずつで、五十名のクラスなら、25名が午前中、25名が午後から出て来るってような勉強の仕方。教科書も今のように無くって、書きうつしたり、新聞のような形に印刷してあるものを自分でハサミで切って糸で閉じて、それを回しながら使ったという教科書です。」

自分「上から墨でぬる、塗り墨もやった？」

祖母「そうそう、それはほんとに終戦に近くなってからで、子供に見せたくないような文面、日本がちょっと負けてきて、悪い状態になってきたときに、子供たちに励ます言葉だと違ってくるから、このページとこのページをみんな塗りなさい、と塗らせちゃって、読ませなかった。破って燃やさないとか。第一教科書がないからそういう作業も少なかったけど、相当塗りましたね。」

自分「実際に塗った？」

祖母「塗りました。毎日塗る作業に学校に行くようなもので、内容がどんなだったかもう読む時間もないくらいに、学校に着くとまず墨を研いで、それで教科書を塗って、わずかな墨と筆で。」

「教育勅語っていう、子供はこういう風にあるべきだというようなそういうのを毎日朝の授業の前に書かされて、それを提出するとちょっと遊んできてよろしいという・・・いまだに全部覚えてます。全部それを言えます。あの頃覚えこんだというものはすごいですね。いいお話だったんです、教育勅語というものは。今でも、たとえば兄弟は仲良くしなさいだとか、親に孝行しなさいとか、そういう教えなんですけども、それが教訓でした。飲み物とか物資がないからまず節約節約。言葉としては、『欲しがりません勝つまでは』っていう標語があって、そういう標語があっちこちに掲げてあるから、そんなにあれが欲しいとか言いませんね。子供も。そういうのはすごく徹底されました。

歌はほとんど軍歌。今のような自由なものうたは全くなくなって、とにかく、『前に進め進め、敵をやっつけろ』という軍歌ばかり歌わされました。」

自分「戦争画を見に行ったりはしましたか？」

祖母「当時は無くって、戦争が終わってしばらくしてから、あの頃はどうかだったっていう、焼夷弾とか、そういった攻撃を受けちゃって、その悲惨さとかを絵に残した人たちの絵が時々新聞なんか載ってたり、広告みたいなのでも、そういうのをどんどん書いて発表するのもありましたね。そのため結構目に入りました。」

自分「戦争画がよく目に入ったというのは戦後からどれくらいでしたか？」

祖母「終戦後自由になったので、その頃のことを思い出した人たちが一斉に新聞なんかでも結構描いてました。戦争中そういうことは絶対知らされなかったもので、本当はこうだったとか、こういう風にあったとかというのを新聞なんかで見ましたね」

自分「戦争画をみて印象に残っていることとかありますか？」

祖母「田舎では体験できなかったけど、本当に、特に東京って、今になっても時々思い出してみんな集まってその時の話出るんだけど、都会に住んでる人たちは、小学生たちは疎開してるんだけど、少し大きい子は東京に残って、空襲にあって、省線、いまでいう山手線を通うのに、ホームの下に隠れるわけ。機銃照射って言って、飛行機がズーと低く飛んできて、ホームにいる人たちをババババッと打つんですよ。それで、それが怖くてホームの下に隠れて、目の前で撃たれちゃった友達がいるといった、そういうことをみんな思い出すって言っています。で、そういった絵をみると、あの頃そうだったっていうことを思い出すんですけど。目に入ることはみんなちょっと年齢が上の人たちはよくそういうのが目に焼き付いていて、実際に体験した事だから、思い出して、絶対ああいうことは嫌ですねって話をこの頃でもします。農家であっても、自分の隣の家まで燃えたんです。焼夷弾が落ちて。焼夷弾っていうのは六角形の10センチくらいの筒が60本ぐらいくぐられて、それが落ちてくる途中で、ひもが切れるんですね。ベルトが。そうするとそれが全部雨のように落ちてくる。その中に油の付いた布が入っているから、それに火がついて落ちるから、まるで火の雨ですね。そういう中を逃げました。10歳くらいの時に、終戦のちょっと前、そのころ、そんなことがあって、よくそういう絵をかかされました。記録にしときなさいなんて。もう今どこにいったかわからないけど。思い出して描いた時期もありました。雨の中を座布団みたいな大きい布団をかぶらされて、水を含むと重いでしょ。でもそういうものを10歳くらいの子が頭からかぶらされると動けないんですよ。でもそれがかぶってないと焼夷弾がどんどん落ちてくるから、それが直接当たって亡くなった方もいます。ほんとうに火のあられのような中を逃げて、次の朝家に帰って来てももう、燃えちゃってなくなっているんだろなあ、うちなんか無いんだろなあって思ったら、お父さんが一生懸命みんなを逃がしておいて、お水をかけながら、守ってくれて、おうちが残ってた

っていう、そういう少女時代を過ごしたのよ。そのころにはもう農家のうちも半分くらいは、五万人くらいなのかな、無くなったのが、亡くなった人の数はわかんないけども、燃えて無くなったのは半分くらい。そして、みんな林の中に隠れたりして逃れたんですけど、もうその頃は終戦ぎりぎりの時期で、梅雨の時期で雨がもう毎日降るのに、家が燃えちゃうんですよね。油を含んだ焼夷弾を落とされるので。爆弾とまた違って、焼夷弾というのは地方に落とされたという。考えられないことでしょうけど。戦争中のことというのは、10歳ころだから、よく覚えてます。」

自分「次に玉音放送についてですが。」

祖母「それはね、当時、私はよく覚えてるんですけど、防空壕がどのうちも必ずあって、子供だからそこに入ってなさいって言われて、大人の人たちが玉音放送を聞きました。実際は雑音が入っててほとんど聞こえなかったんですけど、最近きれいに録音したものを時々放送しますよね。今になって、ああ、そういう内容の放送だったんだなというのを8月15日にラジオから、雑音だらけのラジオから聞こえてましたけど、私たちよりも小さい子は防空壕に入ってなさいと言われて、防空壕のあたりで大人が聞いているのを見てました。天皇が戦争をやめましようという放送でしたね。すごく難しい言葉でした。一般的には、何回聞いても、今でもなかなか理解しにくいような言葉ですけど。聞いたことありますか？」

自分「自分は聞いたことないけど、授業で、天皇だから人間っぽい言葉じゃなく、ひねった言い方だったというのは知ってます。」

祖母「今の皇后さまはちょうど私と同じ年です。こないだ両陛下に直接お会いしたんですけどね。そのお父様の方が昭和天皇が玉音放送を放送しました。原稿を読んだんですけど、難しい言葉だったけれども、とにかくこれで戦争は終わりにしましようという放送でした。今の天皇は疎開地で聞いてみたい。栃木的那須の方だったそうです。」

自分「戦後の占領時代にどんな生活を送っていましたか？」

祖母「戦後ね、これは戦中よりも悲惨だったかもしれない。結局男性は何割ぐらいか、海軍にどんどん召集されて行って、国内に残っているのは女、子供、年寄り、そういう人たちが残って、戦後を守っていました。さあ自由になった、というので、だんだん世の中のことを知らされるようになっていきました。でも何しろ、まだまだ何もなくて、配られた1、2本の鉛筆を一生懸命小刀で削って、大事に大事に、三センチくらいになるまで使って。そんな小学校高学年の生活でした。でも、気持ち的には、戦争も終わって、平和

になって、電気も煌煌とつけて。今までずっと暗かったから、明かりをつけちゃうと航空機からみつかって爆撃されるから、全部黒いカバーをかぶせて暗くして一つの部屋に集まって、休んだっていう感じだったから、カバーをとって全部明かりをつけて。生産する食料品もだんだん買えるようになったけど、まだまだ物がなくて、5年くらいは大変でした。中学、高校生頃だったから、ちゃんと学校には行かれたし、だいぶ地方だったせいか早く戻ってこられて、疎開して来てた子供たちも東京に帰って行って。ただ、戻っても家が焼かれちゃって無いし、それで集めた木か何かで掘立小屋というのを立てて、そういうところで寝起きしてたようです。子供なんかはなかなか東京では住めないような生活状況だったようです。」

「それからが目覚ましかったですね。私たちが仕事をするようになって、結婚して、東京に出て住むようになってからは目覚ましい発展の仕方だったけど、やっぱり戦争は悲惨ですね。いま本当に大きな声で反対しなくてはいけないんでしょうけど、孫たちには本当にそういうのに巻き込まれないようにと、それだけ願ってます。」

「このインタビュー何かに役立つといいですね。いっぱい聞かせてあげたいんだけどきりがありません。でも本当に経験を話せる内にお話ししておきたいなということはいっぱいあります。」

自分「ちゃんと聞いて、将来にも伝承したいなと思っています。」

祖母「いいレポート作ってくださいね」

自分「ありがとうございました。」

一部、実際に話した言葉を文章に合わせて編集しました。

気付いたこと

祖母から戦時中のことについてお話を聞く機会は過去にも何回かありましたが、今回録音という形で残せたのはよかったと思います。最近、戦争の体験談を語っている人に対して、小学生か中学生くらいの子が「死に損ない」と発言したことをテレビで取り上げられていて、驚きました。どうしてそのような発言をしてしまったのか、将来戦争と向き合ううえでこういったことが無いように、しっかり戦争の悲惨さ、やってはいけないということを伝承したいと思いました。趣味である折り紙関連でも、最近「佐々木貞子像について」の話聞く機会があり、今はまだ戦争について学ぶのに多くの機会が残っていると思いました。自分の場合、小学生頃に見た「二十四の瞳」のドラマが印象に残っていて、そういった映像などでも、戦争の悲惨さを将来に伝承するうえで大切だと思っています。像やドラマといった形で残るものも重要ですが、伝承するためには、きちんと世代で直接戦争についての話をするのが大切だと思いました。